

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 宣 承慧

陶淵明に関連する主題の絵画は多様であり、地理的には中国、韓国、日本に広がり、歴史的には古代から近代に及ぶ。文献史料、作例ともに膨大な量が存在する。本論文にはできる限りその全貌を把握しようとする壮大な企図があり、少なくともこの点は評価されるべきだろう。

本論文はまず、陶淵明を主題とする中国絵画として、詩人の肖像を描くもの、一代記形式でその生涯を描くもの、その故事を描くもの（白蓮社図、虎溪三笑図）を分類し、さらにその詩文に取材する採菊東籬図、帰去来図や桃花源図を加えて、それぞれがいかなる典拠や意味を持つかを検討するとともに、世界中に散在する現存作例を集成する。こうして源流というべき中国の作例を押さえた後、韓国と日本で進展した主題の変奏を追跡するところに本論文の主眼がある。

韓国と日本、それぞれの国で陶淵明がどのように受容されたかは、かなり長い期間にわたっていねいにたどられている。高麗時代、朝鮮時代を通じて、陶淵明のイメージは隠逸者と忠義の臣の間を揺れ、虎溪三笑図、帰去来図、桃花源図の流行にも盛衰があったことが示される。それらを主題とする韓国絵画の現存遺品は少ないが、文献史料がよく援用されており、また数少ない現存例であるとともにすべての桃花源図中の白眉というべき安堅筆「夢遊桃源図」（天理大学図書館）については、特にその制作にまつわる政治的状況の詳しい考察がなされている。

日本では室町時代以来、虎溪三笑図が格別さかんに制作されたことが指摘され、特に江戸時代絵画の放縦な表現が示されるとき、この主題が近世の日本で興味深い展開を見せたことが納得される。論旨との直接の関係は薄いですが、従来その実像が不明だった明末清初の画家呉令について新たな情報を得たことは、日中の絵画交流史においてひとつの貢献となろう。

文献と作品とを博搜しているといつてよいが、漢文の文献について書誌学的な知識や読解力の不足を露呈している箇所もある。また、作品の質の判断を保留し、それぞれの絵画が絵画としてどういう表現の特徴を持つかという観点からの分析が乏しいために、作品どうしを相互に関連づけて絵画史を構築する力が弱い。したがって、美術史学の研究論文としては現状ではけっして高度な達成であるとはいえないが、扱われている問題は美術史にとどまらず広く東アジアの文化史研究に発展する可能性を有する。また、中国・韓国・日本の3つの言語と地域にまたがる困難な研究が、論者によってここまで実現できたことも評価すべきであろう。審査委員会は、今後の課題が多いことを確認した上で、博士（文学）の学位を授与するのを適当と判断した。